

42166

教科書文庫

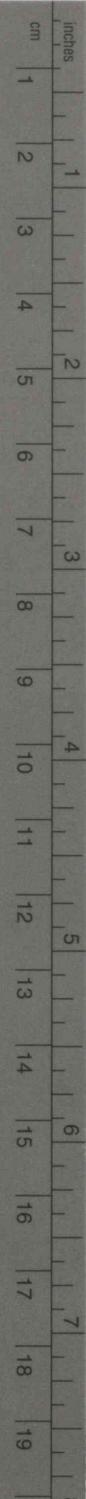
4
810
42-1922
200030
1953

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



訂文部國語讀本

卷六



資料室

日八廿月一年一十正大
濟定檢省部文
書科教科語國校學女等高

375.9
Y019

吉田彌平 篠田利英
小島政吉 岡田正美 共編
五女子國語讀本卷六

東京

金漢堂書籍株式會社

訂五女子國語讀本卷六

目次



- 一 大學書院
二 大學書院
三 果物の味
四 忘れがたみ
五 日光の山路
六 利根川の秋曉
七 海の光
八 桃の嫩葉

目次

九 留守宅へ 細井平洲元

一〇 辯論術 四

一一 武藏野 國木田獨歩四

一二 嶽雪 德富健次郎吾

一三 富士の高嶺 五

一四 ヒマラヤ紀行 西

一五 椰子の實 島崎藤村癸

一六 倫敦人の生活 池邊義象癸

一七 霧の倫敦 夏目漱石三

一八 蓮月尼 鹽井雨江光

一九 吾妻路 阿佛尼金

二〇 浮島原 義經記公

二一 本多重次 新井白石九

二二 稅所敦子君を誅す 高崎正風七

二三 綾のみけし 三

二四 鼎かづき 兼好法師壹

二五 安元の火 鴨長明三

二六 日蓮上人 高山林次郎元

二七 蘭人の趣味 松本亦太郎二

二八 蛙の聲 長塚節三

二九 都に着きて 樋口一葉三

三〇 道 大西祝三

訂五 女子國語讀本卷六

圖書印
大學

*文名は芳衛。

一 田園雜興

大町桂月

みづから世を避けて門を鎖すにはあらねど、片田舎に住めば來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸さんには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到らず。啻に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。汽車の便をかりて都門より歸り来れば満園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りて我が手の風呂敷包に縋る。例として土産の菓子有らんを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬることぞ恥かしけれ。

蒸暑き夏の夕べ、涼臺を無花果樹下に移して、一家晩餐に團欒すれば竹葉そよぎて、涼氣自ら盤上に逕る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の鶏と分ち、池の鯉と分つ。今一つ、一

匹の犬いつも食時を違へず來りてかしこまる。これ近隣の家の飼へるものなり。その主人、近頃妻子を殘して病死せり。喪家の狗のたとへ思ひ出されて、あはれるなるまゝに、残肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にかぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水わきて流れて田にそゝぐ、もとは、朽木中に満ちて、蛙やゐもりの棲處となり、岸には雜草生ひ茂りて見るかげも無かりしが、草を芟り、朽木を取除け、ゐもりを捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺む

るに蛙カエルのもののみと思の外、長さ一尺ばかりの黒鯉ありて游ぎめぐり、人の足音聞きては穴深くひそみ行く。大兒と中兒と之を見て興おきがり、今少じ鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を書き、或は集り或は散じ、時には水面に喰くらひし、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に上ちてこれを眺め、これに餌を與ふること、三兒にとりてはこの上もなきなぐさみなり。

おほつかなげに、とゝゝゝと呼びて雞に餌を與ふることも、亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集まり先を争うて食ふ。雄三羽、

雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一羽、最も慄悍ヒヨクカンなり。餌を貪むること甚だしく、近よるものゝ頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎し。他の雞恐れて敢へて近よらず。されど最も大いにして好き卵を生むは、このしやもなり。

われ平生物累シルなきことを希ふ。一室の中、粗末なる机と書物との外には、また他物なし。興來りて筆を執り、書を繙き、興盡きて則ち臥す。雞遠慮なくも座に上り來り、机上に立ちて啼くことあり。ごむ履はきて庭に遊べる小兒、いつの間にか、履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど、雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは履にて上り居なが

ら、兩手ひろげて雞を追出すもいとあどけなし。末子は未だ口もきけぬ程の年頃なり。母の乳に飽けば、をりく我が机邊に来る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。所謂家庭の感化は自らかゝる中にあるべしと思はる。あまりおとなしきに、ふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることなどあり。可愛や、幼兒、清正の猿と相去ること遠からず。

園中兒を喜ばしむるのは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、トンボなり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば只うれしきなり。

慾もなし、名利の念も無し。沈思して自然に對すれば、始めは其の愛すべきを覺ゆ、終には其の敬すべきを覺ゆ。

かかるたのしき我が團欒にも、なほ一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や、齡古稀に近し。常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食少きを憂ふ。「親を思ふ心にまさる親心」と詠じけん。世に子の病ばかり親の心をいたましむるものなし。罪ふかきかな。我もまた不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に、強ひて餐を加へ、久しう絶ち居りし晝食さへ物するに至りぬ。食進むやうになりて、うれしとて母の喜ぶ様、見るにつけても覺えず涙ぐまれ

親な
さる思
ふ心にま
の聞
くらん。
吉田松陰。

(三)支那の昔、時代の趙の武將。

しこと幾度ぞや。（春草秋草）

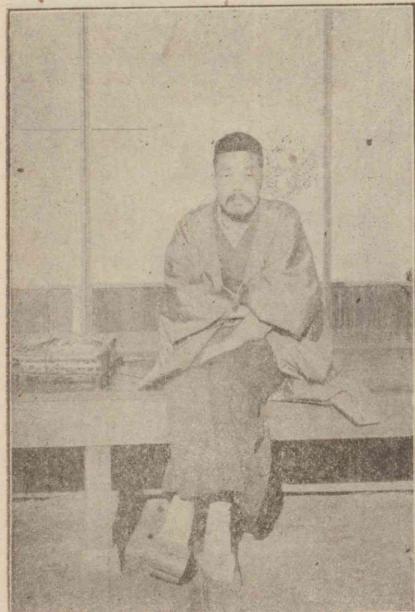
*名は常規。俳人。
明治三十五年夏

二 果物の味

正岡子規

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒は之を好み、仙人も之を食ふとかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味言ひ難し。杏はからびて賤し、李は水多くしてあさはかなり。いちごは西洋いちごを善しとす。されど行脚の足くたびれて、草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰打据ゑて、汗を拭ふ手の下に端なく見附けて取り食ひたる、味は問はず、時に取りていと嬉し。神戸に病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲み得ぬに、わがためにと

高東碧梧桐。
高濱虚子。



規子岡正

て、碧虛二子の、朝な／＼諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉
をもたらしくれたる、いかばかり嬉しかりしそ。
枇杷はうまけれど、種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。

桑の實はなべての人にも
知られねども、果物の中、
これをお外にして甘きものはない。
晝餉さへい
たゞめずに貪りたる木
曾の旅の思ひ出でられ
て、なつかし。夏蜜柑・ザボンの類、俗を離れて涼し。さして
善しとにはあらねど、少し病みて飯さへえたうべぬ時など

またなきものとぞ覺ゆる。

梨は涼しくいさぎよし。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら一片を口にしたる、氷にもまさりてすがすがしうこそ。林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えてすゞやかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の藥にも似たらんか。桃には種類多し。善きもあり、惡しきもあり。



碑の規子岡正るな市山松

西王母に仙桃をすゝむ

*王母後園の風味は知らねど、總べて桃は世にへつらはぬと

ころに一段高き趣あり。

甜瓜・西瓜ひなびたれど誠あり。捨て難し。葡萄は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとて世に負かず、君子の風あり。栗は賤し。甘藷とくらべられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷かなる腸を持ちながら味はいと濃かなり。多血性の人、世を厭ひて里に隠れながら、猶物に觸れて熱血を迸らすにもたとへんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。石榴無花果のわれから裂けたるは喰ひ劣りぞする。

われ此の夏頃より、わけて果物を貪り、物書かんとすれば必ず之を食ふ。書きさして倦めばまた之を食ふ。食へば則ち心すゞしく氣勇む。氣勇めば則ち想涌き筆飛ぶ。われ

力を果物に借ること多し。

日毎く、十顆の梨を食ひけり。

朱硯に葡萄のからの散亂す。

柿くうて、洪水の詩を草しけり。(子規隨筆續篇)

*東京帝國大學總學長
三文博士。明治三十一年夏

三 忘れがたみ

外 山 正一

風の音だに聞えず、いと靜かなる冬の夜の星月夜なるは、何となくあはれなる心地せられけり。

夜の更け行くまゝに、行通ふ人も次第にとだえ、庭に鳴く露の命の蟲の音は、絶えくにこそ聞えけれ。

丑三つにはなほ程あれども、晝のかせぎに疲れたる賤の身

は、手足を伸してはや熟睡せるも少からず。

明日の竈の細き烟は、立つや立たずと行燈の暗き影にて、繰返し繰返し僅かなる賣溜の錢を數ふる夫婦の者あり。

乳呑児に乳房を吸はせ、背を叩きて寐させつゝ、子の行末を案じ煩ひ、夜のふけ行くを知らざる親あり。

神に願かけ、佛に祈り、薬よ、灸よと手に手を盡し、我は死すとも最愛の子の命をば助けんと心を碎きし甲斐もなく、命數已に盡きしにや、玉の緒の絶えて果敢なく消え失せし子のなきがらに抱きつきて、今ははや此の世に生くる甲斐もなしとよと泣入る母親あり。

百年の後までも老いたる親に孝行盡し、海より深き大恩に

行末永く報いんと誓ひしことも水の泡にて、まだ萬分の一
だにも盡さぬうちに、親ははや歸らぬ旅に門出したれば、夢
かとばかり思へども、さてあるべきにあらざれば、泣くく
湯くわんをなし終り、戀しき親のなきがらを、今や極に歎め
んと氣を勵ませど、若者はせきくる涙せきあへず只茫然と
してたゞみたり。

蝶よ花よと掌の中の玉の如くに育てたる一人娘の明日は
めでたき婚姻にて、その喜と支度のために家内は上を下へ
の騒、父母は疾く今日の夜の過ぎりて明日の来るを待兼ね
るにおぼこ氣の恥かしさにて、何事をなせども更に手につ
かず、寝ても寐られぬ娘あり。

明日は主君の面前にて、佞人ばらの惡事を發き、事宜により
ては刺違へ、我も共々相果てんと、忠義の覺悟は金鐵にて、只
一心に君の爲を思うてねたばをあはする武士あり。

實に人ははかなきものなり。今日の夜はまだ過去らざる
に、ひたすらに明日・明後日のことにのみ、とかく心を移しが
ちにて、如何なる天の災が、すぐ眼前に迫ればとて、「一寸先は
闇」の譬、明日ともいはず、今宵のうちに、深き淵瀬に陥らん身
とはつゆ知らずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

風なく、雨なく、いと靜かなりし冬の夜は、忽ちにして奈落の
底を見るに至れり。

泣く者も、笑ふ者も、喜ぶ者も、怒れる者も、舞ふ者も、歌ふ者も、

樂しむ者も、齊しく一度に聞きたるは、地底に聞えし大山の崩るゝばかりの響なりけり。

すさまじき勢にて、大地は下より突きあげられ、地上はさながら激浪おほなみの打つが如くに震ひ動けり。

安政二年十月二日、時刻は夜の亥いの刻かとよ。地裂じりけ、天墜あまついつるかと驚かれたり。

見るゝ百萬の人家・倉庫・神社・佛閣倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦にうたれて死せるもの、幾許なるかを知らず。一時に落來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣叫ぶ老若・男女の聲に和して、譬ふるにものあらざりけり。

暫くして、地の震じんやゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、

あとに残りて聞ゆるは、親を呼ぶ子の聲なり、子を尋ねる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞ゆるは、次第々々に細くなる「助けてくれ、助けてくれ。」の聲なりけり。

理なるかな、梁に壓さるゝ者あり、柱に挾まるゝ者あり、土に埋めらるゝ者あり、壁にしかるゝ者ありて、さらぬだに苦しむ者は多かるに、地のふるふこと未だ止むか止まさるに、四方の天は一面に、次第々々に明るくなりて、さながら晝の如くなりしは、處々方々の潰れ家より、火の炎々と燃出でて、焰の天を焦すなり。

家に潰されて、身は動かず、悶え苦しむその處に、燃來る火の

ために、煙に咽び、熱さに耐へかね、遁れんとしてあせれども、遁るゝこと叶はねば、聲を限に叫べども、助に來る人はなく、無間の地獄・阿鼻アヘの熱、無慚といふもありありけり。

此の夜わづかの時に死したる人のその數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いとも哀なる死にさまのものもありけり。

運強くして、不思議にもその身は萬死を遁れたれど、親・兄弟の無慚の死をそぞろに悲しむ者もありけり。

枕を並べて臥し居たる夫婦にてありながら夫は梁に壓潰されしが、妻はねだの抜けたるために下に陥り、不思議にも命を助かりたるものあり。

梁に敷かれし我が妻を助け出さんとあせれども、力及ばざるその内に、あたりは一面火になりて、見すく妻の焼け死ぬるを残して去れる夫もあり。

妻子は如何になりつると崩れ家を取除け見れば、こは如何に、妻は穴藏に半ば埋まり、片手には稚兒チヨウの足をつかみ、うらめしげなる顔つきにて色さめて死せるもありたり。

されば此の夜の不運の者には、或は祝の席に於て、或は悲の最中に、寐耳スリメに水に死せるなど、語るもあはれなる者ありしが、これらは人の身の上なり。我にも此の夜の話あり。

父は此の夜は宿直シテイの番にて、家を守り三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は母の左右に寝ね、末なるは乳

母に抱かれて、枕邊に臥しるたりき。

あるまじきことなれども、すは、地震よ。といふとひとしく、乳母は抱きし子を捨てゝ、我のみ外へと逃出でたり。母は啼く子を抱き上げ、右と左に寝たる子をゆり起さんとあせれども、稚兒を抱へし身にて、大浪にゆらるゝ如く動きつゝ、片手に起す左右の子は、冬の夜の寐入りばなとて、起せども起せどもいつかなく起くればこそ。うつゝにて母に連れられて、外へ出でたる時は、地のゆるゝも止みしあとにて、四方の天は、火事にて既に眞赤になり居たり。

實に危かりしは我々親子の命なりけり。そも安政の地震には、水地なる舊家の潰れぬものは稀なりしが、我等が住ひ

し舊家も、潰れぬばかりに傾きたり。

今において想ひおこすも、身の毛のよだつは此の夜の事なり。此の地震にて、我等が家のもしや潰れもしたらんには、我が兄弟は死したりとも、誰をも恨むべきならねども、もし母の死したらんには、我等が罪にてありたるならん。

さりながら、此の夜もし我等親子が死したりせば、何故、母が死せしかば、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを、子の爲に死せしなりとは誰か知るべき。

今もなほ忘れざるは、久しき昔の此の夜のことなり。實にありがたきものは母の愛なり。母は其の身の危きをも顧みずして、一心に子を助けんと爲しゝものなり。

實に深きは親の恩なり。われに今日あるは、この愛を以て育てくれたる母ありたるが爲なり。我は自ら知らざれども、我が母が此の夜の如くに、其の身の危きをも顧みずして我々の身をば護りくれたるは幾度なりしか知られざるならん。

此の夜のことは、亡き母の、われには忘却がたみなり。此の夜我々親子より運拙くして死せるものには、助かるべきを子の故に死したる母は幾許なるらん。

此の夜の事は、亡き母の、我には忘却がたみなり。此の夜の如き天災の若し今日の夜に起らんには、助かる命を子の爲に棄てんとする母親は幾許なるか知らざらん。實に深きは親の恩なり、忘れ難きは母の愛なり。（新體詩歌集）

四 日光の山路

十月二十六日午前十一時、上野發の列車にて、小春の田舎三十里が間を瞥見しつゝ、點燈ごろ日光に着き、翌日、中禪寺に向ふ。日光より中禪寺まで三里、半途の清瀧までは所謂山舒水緩の境にて、他の奇なし。清瀧より足尾街道と岐れて右折し、始めて山間に分けいり、馬返の山村を過ぐれば、路高峯の間に入りて、頭上の青天、巾より窄く、大谷川雷の如く脚底に吼ゆ。

此より中禪寺湖に到るまでの一里は、錦繡の山なり。槭・漆・



山柿・樺・櫻等燃えに燃えて、黃
焰・紅火眼もあやに、松・檜・櫟などの絲のちらほらと入交り
たるも一入の眺なり。谷を
流るゝ大谷川は石に激して
は白雲を散し、淵を湛へては
紺碧を染む。巖より巖にわ
たす獨木橋を岩魚釣る男が
魚籃提げて行くも、其の儘、畫
としつべし。路は山色水聲
の間を通じて、一步々々仰ぎ上る。ふと、頭を上ぐれば、夕陽

共に滝の名。

火の如く右側の諸峯に當りて、半峯以上は赫として燃えん
とするに、左側の諸峯は落暉に背いて薄紫に暗み、有りとも
見えぬ山腹の炭焼小屋より一條の白煙縷々として立上る。
華嚴の下流と方等の下流と落合ふ邊にて、金髮碧瞳の西洋
婦人の籐椅子に乗りて下り来るに逢ふ。夫なるべし、其の
後より鬚髯うるはしき西洋紳士の逞しき栗毛の馬に乗り
て来る。更に上る程に、一曲の俚歌頭上に起りて、坂を曲れ
ば、歌の主なる十二三の小娘が炭貢へる馬をぞ追來る。赤
襟襦袴に白手拭を被り、草鞋・股引・手甲の姿甲斐々々しく、馬
背に一枝の紅葉を挿したるなど、畫にも歌にもしたき風情
なり。

方等の瀧見茶屋を過ぎてよりは、何人にも逢はず。木間越しに光れる夕日の山は薄れ行きて、夕霧谷間より這ひのぼり、蒼然として暮れかゝる。何處ともなく響く瀧の音、我が踏む落葉の音の外には、何もなく、秋山の黄昏いとゞ身にしむ。詩など吟じつゝ行く程に、羊腸の坂盡き、疎林開けて一面の明鏡白く夕暗に光れるを見る。中禪寺湖の吾が前に展開せるなりき。この夜は湖畔の宿に水禽の夢穩かに眠りぬ。

翌日は華嚴の壯觀に接して心目を駭かし、それより山を下りて日光祠に詣づ。人工の美亦捨て難くはあれど、自然の美を擅に眺めし身には、何となく飽かぬ心地して、勿々に看

過しぬ。

五 利根川の秋曉

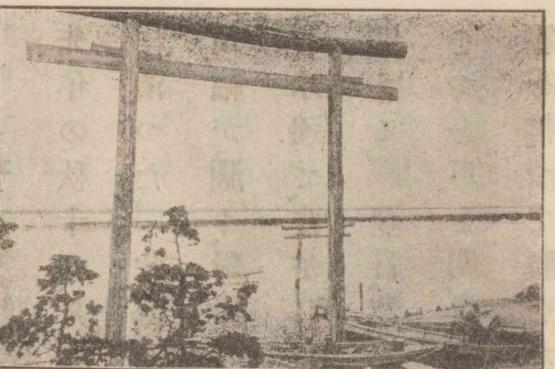
徳富健次郎

(青蘆集に據る)

先年の秋十一月の初旬ごろ、利根川の左岸の息栖(三)いきすと云ふ處に泊つた。此處は利根の本流が北浦の末流と落合ふ處で、川幅が濶く、對岸の(三)を見川(みがは)までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眠をさますと、櫓の音がぎい／＼と枕頭に聞える。翌日、黎明に起きた。宿の者はまだ寝て居るので、そつと戸を開けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で、雞が

(二) カーライル。英
國の思想家。
—1795—1882

(三) エマソン。米國
の思想家。
—1803—1882



勇ましく暁を告げると、餘程たつて、川向ふの小見川の方からいかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔てゝ呼びかはす此の雞聲は、實によい。^(二) ナエルシーの賢と^(三) ユニルドの哲とは實にかくの如く、大西洋を隔てゝ呼びかはしたのであらう。自分の眼には、暁は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌上つて来る様に思はれた。

暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり／＼水蒸氣が見えて來た。實に迅い。瞬きする間がないのである。夜は川下の方へ流れ、曙の光は四邊に満ちて居る。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少し褪つつふ。忽ちきら／＼とまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れて、鳥が一羽、朝日を負うて、さながら暁を告げる神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々として朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。^(二) 背後^(三) の茅舍から煙が立上る。今柵を出た家鴨が足跡を霜につ

けて、くわつくと呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。川楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き吹き、川を下りて、河水を掬んで口を嗽ぎ、顔を洗ひ、それから、遙かに筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あれ實に好い拜殿である。」と自分は思つた。(自然と人生)

歌名は雄太郎。

六 海の光

金子薰園

今日は一天麗らかに晴れて、海は紺青を流すやうに平になつてゐる。白砂の上にならび立つ青松の根もとを洗ふ波の音も、ゆるくのどやかである。白い砂は何處までも續いて、青い松もそれに伴つて立ち連つてゐる。松と松との間

に處々漁家らしい藁屋が點在してゐる。其の一軒から晝餉の煙が白くあがつてゐる。廣い、はてしもない海原を控へて、其の細い一すぢの煙が、いかにもはかなげに、別に離れて見えてゐる。やがて家中から五六歳の小兒が出て、紺青の海を眺めた。其の一すぢの白い煙は、この小兒の出現と共に、離れたものと見えなくなつた。小兒はやがてしゃがんで、すぐ前の貝をいちつてるたが、それにも倦んだらしく、又廣い海原をながめ始めた。

小兒の眼の前遠く、白い帆の影が見えた。小兒は手を擧げてそれを招くやうなさまをした。小兒はつゞいて聲を出して、今度はほんたうにそれを呼んだ。呼べばすぐに向ふ

へ其の聲がとどいて、其の白帆がちきに此方へ來るやうに思つたのだらう。小兒は聲のかぎり呼んだが、白帆は依然として沖遠く見えてゐる。走つてくるのか、止つてゐるのか、分からぬ。

小兒は其の白帆を呼ぶにも倦んで、白砂の上を駆け出した。日は暖かで、小兒の額のあたりは汗ばんで來た。いつしか白い犬が出て來て、其の小兒と共に走つてゐる。犬も小兒も疲れて、松の根もとに休んだ。其の松は並んで立つてゐる中で、一本きはだつて高い。其の松の頃邊で不意に鷗が啼いた。小兒も犬も一度に其の鷗を見た。鷗は其の下に小兒のゐることも犬のゐることも知らないらしく、又啼いた。小兒は自分達の存在を無視してゐるやうな鷗の態度が癪に觸つたか、小さい兩の手に全身の力を籠めて其の松の樹をゆすらうとした。無論松の樹は搖きさうにも無かつた。犬は小兒の後に、黙つて見てゐる。

鷗は又啼いて、羽ばたきをして、今度は海の方へ飛んで行つた。藁屋の方から、晝飯を告げる聲がすると、小兒はあわてて其の家へ駆け込んだ。

油を流すやうな紺青の海は、日に輝いてゐる。白帆が又一つ殖えた。矢張り動いてゐるのか、止つてゐるのか、わからぬ。白い犬は波打際に揚げられた藻の香を嗅いでゐる。小兒の家から岬へ烟管した老爺が出て來て、一寸海の方を

見てゐたが、そこへ蓆を敷いて、網をすきはじめた。いつしか鷗が五六羽飛んで来て、此の老爺のほとに遊んでゐる。老爺はこれに目もくれないで、馴れた手つきで網をすいてゐる。

海の光は輝きを増して、並び立つ此の磯の松の一本々々を照り返す。此の光の世界の中に網をすいてゐる老爺と五六羽の鷗とが、思ふさま光を浴びて動いてゐる。すると、彼の小兒の姉らしい少女が出て來て、老爺の肩をしきりに搖ぶつたが、老爺は何とも言はなかつた。少女の髪の毛は赤茶けて、顔は潮風に黒いが、眼の涼しい鼻の高い、きりつとした顔立ちをしてゐた。老爺が黙つてゐるから、少女は前よ

りも烈しく肩を搖ぶつたので、やつと少女の方を見る。少女が何か手真似をすると老爺は首肯いて家に入つた。

少女は啞であつた。老爺も去り鷗も去つたあとの光の世界を獨占してゐるものは、啞の娘であつた。娘は薄倖な身をつゆ嘆つやうな様子もなく、伸々とした顔付をして、松の樹に背を凭せたまゝ、輝く海を見てゐた。(青流)

七 秋の月

皆人の晝寐のたねや秋の月。

順禮の棒ばかり行く夏野かな。

これはくとばかり花の吉野山。

貞徳
重頼

貞徳	重頼
季貞室	言水

宗因口來山

一僕とぼくくありく花見かな。

季吟

木枯のはてはありけり海の音。

言水

白露や無分別なるおきどころ。

宗因

三味線も小唄も乘らず梅の花。

來山

米澤藩主、文政五年
と號す。卒す。

ハ 桃の嫩葉

上 杉 治 憲

女子は我が家を出でて夫の家を家とし、我が父母を離れて夫の父母を父母とするものにて、孝貞の二つこそ婦道の一なれ。孝とは舅姑に事へて敬愛を盡すをいひ、貞とは夫に事へて節操を正しくするをいふ。孝子深愛の心あれば必ず和氣あり。和氣あれば必ず愉色あり。愉色あれば必ず婉容あり。舅姑をいとほしく大切に思ふ心深ければ、相對したるとき、自然と氣和して、違ひ戻ることなきものなり。

其の氣和げば、おのづから顔色もにこやかになり、顔色にこやかなれば、自ら身の起居振舞もしとやかにして、能く物に順ひて逆ふことなきものなり。

されど、これらの事、眞實より出づるにあらずしては、こしらへものにて、一朝一夕そのごとくすとも、つひにはその偽も顯れて、舅姑にも見限らるゝぞかし。若し、眞實の誠だにあらば、當



像 山 杉 麟 上

時行届かぬことありとも、これもまたいつしかその誠顯れて、舅姑をも感ぜしむべきなり。「聲なきに聽き、形なきに視る。」といふ。誠よりするにあらでは、何ぞ得ん。女は、人に適きては、終身我が父母に事ふるものにあらざるを、人情として我が父母をのみ慕はしく思ひ、又、生れしより見習ひ聞習ひたれば、我が家の事のみ善しと心得る故、舅姑夫への事へかたも疎かになり、家事も我が家の風にのみなしたくなるより、人々の心にも違ふなり。已にその家に嫁する上は、何事も舅姑夫の命を承りて、その家風に従ふべきなり。

かく云へば、女子は我が父母へ孝を盡すことはならぬやうなれども、さにあらず。他門に嫁して、舅姑に善く事へ、夫婦

の間も睦まじく、子孫繁榮するを見ば、我が父母の心にては、いかばかりか嬉しからん。孝は父母の心を悦ばしめ、安んぜしむるに如くことやはある。我が父母の嬉しく安んじたまふやうに舅姑夫へ事ふること、これすなはち我が父母へ孝を盡すなり。(桃の嫩葉)

九 留守宅へ

細井平洲

刈安賀村に三輪と申候百姓の妻有之五十七歳になり申候。夫は病身に御座候うて二十五の時より床に就き居申候、今年六十四歳になり候由。三輪十八歳より病夫を大切に致し、貞節を立て候間、近邊にて貞女の名

(一) 侯名は徳民。
 (二) 上杉の儒官。
 (三) 享和元年に嘗て尾州に亡る。國中島郡にあり。

隠れなく候。呼出し逢ひ申候へば、有難がり泣き申候。やがて上よりも御褒美有之候はんと存候。誠に珍しき貞節に候。しをらしく俳諧をよく致候。拙者へ發句をくれ申候。

かへり花咲くや、日の恩土地の恩。

と致してくれ申候。手もよく書き、處の娘どもへ指南致申候。三輪が弟子になり候娘どもは水際立つて行儀正しく候由、處の者共吹聽致候。拙者も感心の餘り歌を詠み遣し申候。

雪をはらふ嵐の風のさむけきに

松のみどりの色もひとしほ。

是は三十餘年夫に事へ貧苦艱難を致候故、貞女の操も愈々顯れ申候との心にて候。おみほへ御聞かせなさるべく候。扱々御徳の有難さ、土民の女房まで道を守り、やさしき女も追々あらはれ、誠によその國にはなき事どもに候。子供怪我させぬやうよくく御申附なさるべく候。めでたくかしこ。

十月二十一日

平

洲

おさめどのへ

今年は大分年もとり、氣もくせくと致候へども、在郷に參り、人々の善くなりたる様を見候へば、額の皺も大分伸び、氣もわからくなり申候。

一〇 辯論術

むかし、希臘に辯論術を教へる先生が有つた。一人の弟子が其の門に入つて學んだ。業成つて去るに臨んで、先生に向つて、永年御教育下さつた御禮に金若干を差上げたいと思ひますが、只今は少々手都合が悪うござりますから、半金だけ差上げて置いて、あとの半金は私が他日法廷に出て、最初の訴訟に勝つた時に差上げることに致しませう。」といつて、しかと約束をつがへて別れた。然るに、其の後弟子は一向にあと金を持つて來ず、一二度催促して見たが、お約束の通り、法廷で訴訟に勝つたら、その時に、といつて少しも應じ

ない。それのみならず、故らに法廷に出るのを避けて居る様にも見えたので、先生は大いに怒つて、遂に弟子を相手取つて謝儀請求の訴訟を起した。

さて、法廷に於て師弟顔を見合せた時、先生、弟子に向つて、このおろか者よ。判決はどうならうとも、お前はわしに謝儀の後金を出さねばならぬぞ。若し判事がわしに勝を與へられたならば、お前はその判決に従つて、わしに謝儀を出さねばならぬ、又、若しお前が勝つたならば、お前は豫ての約束によつて、やはり、わしに謝儀を出さねばならぬ。」といふと、弟子はこれに答へて、賢明なる先生よ。判決はどうならうとも、私は先生に謝儀を差上げるに及びません。若し判事が

私に勝を與へられたならば私は、判決に従つて、先生に謝儀を差上げるに及びません。又若し先生がお勝ちになつたならば、豫てのお約束によつて、やはり私は謝儀を差上げるに及びません。』と答へたといふ。

*名は哲夫。
明治四十一文學
年穢す。

二 武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は萱原のはてもない光景であつたやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。その木は重に樅の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。その變化が秩父山以東十數里の野に一齊に行はれて、春夏秋冬を通じて、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、様々の光景を呈する。その妙は一寸西國や東北地方の者には解りかねる。元來、日本人はこれまで樅の類の落葉林の美をあまり知らなかつた。林といへば、重に松林のみが日本の文學・美術のうへに認められて居て、歌にも樅林の奥で時雨を聞くといふやうなことは頗る稀である。

自分は屢々思つた、もし武藏野の林が樅の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩の一様なものとなつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。

樅の類ながら、黃葉する。黃葉するから、落葉する。時雨が呴く。木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬

露國の文學者。

の木の葉が、高く大空を舞うて、小鳥の群のやうに遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に亘る林が、一時に裸體になつて、蒼すんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。* ツルゲニエフが林間の晚秋を描いたものにも、「坐して、四顧して、そして、耳を傾けた。」とある。この耳を傾けて聞くといふことが、どんなに、秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば、林の内から起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戦ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の

蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車・荷車の、林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音。是は騎兵演習の斥候か、さもなくば、夫婦連で遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつてゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林で、だしぬけに起る銃音。

時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から、和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、又、林を越えて、しのびやかに通り過ぎる音の、如何にも幽かで、又、鷹揚な趣があつて、優しく、懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は、嘗

東京の近郊。

て、北海道の深林で、時雨に遭つた事がある。人迹絶無の大森林であつたから、その趣は更に深いものがあつたが、そのかはり、武藏野の時雨の人懷かしく聞く様な趣はなかつた。秋の中ごろから冬のはじめ、試に中野あたり、或は、滝谷・世田^{(一)(二)(三)(四)}が谷^(五)、または、小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲をやすめて見よ。それ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風もなきに落ちてかすかな音をたて、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るを覚えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干とさえた時、星をも吹落しきうな野分が、すさまじく林を渡る音を、自分は屢々日記に書いた。風の音は人の

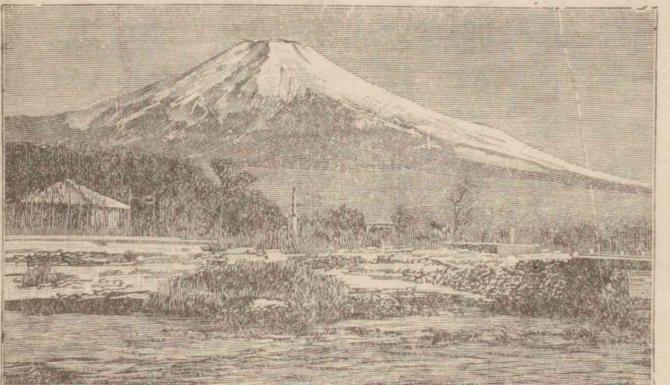
思を遠くに誘ふ。自分は、この物凄い風の音の忽ち近く、忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつづけたこともある。

林に坐つて居て、日の光の最も美しいのを感じるのは、春の末から夏の初で、その次は黃葉の季節である。半ば黃色に、半ば綠な林の内を歩いて居ると、澄渡つた大空が梢々のあひ間からのぞかれ、日の光は風に動く葉末々々に碎けて、その美しさは、いひ盡されぬ。日光とか、碓氷とか、天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に、一面に火花を放つ有様は、是また武藏野の特異の美觀ではあるまいか。（武藏野）

二 獄雪

徳富健次郎

富士雪を帶ぶ。さやかに雪を帶ぶ。



秋空何ぞ高き。風威を帶ぶる相模灘の怒號何ぞ壯なる。此の空と此の海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

山絕頂より五合目の邊まで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹縁

をとれるが如く山を包む。

雪色淨うして點塵なく、日光に輝き、水よりも澄める晩秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立驛ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ゆ。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色・神采を十倍せしむるのみならず、更に四圍の大景に眼睛を點す。東海の景は富士によりて生き、富士は雪によりて生く。(自然と人生)

一 富士の高嶺

徳川光圀

水戸
の主、
徳川家二代
年慶
元禄十三代

一 富士の高嶺

たちれふらまうだれあきてしま
わるの本のすのうつね

賀茂真淵

やひのすとをいでゆく雪は
あづみはふかわ

卒居宣長

あけましる雲ちゆりともと
なよどくびよのうき

加藤千鶴

江戸の人、眞淵
和元年歿す。
伊勢松阪の人、
眞淵の屋と號す。
享鈴

江戸に住み、明
和六年歿す。

うのねを木のまにかつうて
ねがふもうきよまうづ

村田春海

うあてニアリをまはすと
たはねうはくはくす

堺保巳一

うほのたよぐの身にまくわむ
なづくよやゆきのうのね

香川景樹

江戸の人、眞淵
文化八年歿す。

武藏守、父部保木
の産、文政四年歿す。

京學者、歌人、天
保十一年歿す。

みまつもすとにてくもくも
ナラテスリヨクすじまつり

一 ヒマラヤ紀行

ヒマラヤの四十八大峯、その高さ何れも我が富士山の二倍あり。エベレストは世界第一の高峯にて、直立二萬九千九呎に達す。餘脈は姑くこれを措き、其のヒマラヤ本系と稱する者、東西二千哩、印度大半島の北部を劃する大障壁となりて、絶えず印度洋面より吹送る熱帶の水蒸氣を雪となし、雨となし、以てドラマプト・ラ・ガンガ・イングスの三流を其の

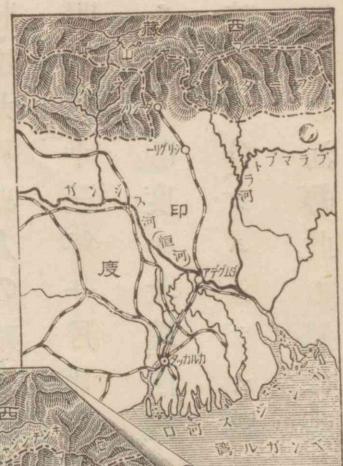
南側に吐出す。世界最豐饒の平原これが爲に生じ、世界最古の文明これが爲に起り、而して、世界第一の偉人亦これが爲に生れたり。千古萬古遙かに下界の治亂興亡を瞰下して、今なほ世界の祕密國たる西藏を背後に包擁す。其の豪壯・雄大、見ぬ人の殆ど夢想する能はざる所なり。

明治三十三年一月廿四日午後三時、汽車にてカルカッタ市を發し、印度の北端、西藏の關門たるダージリンに向ふ。七時三十分、ダムクデヤ驛に達す。恒河畔の停車場なり。恒河の河幅、此の邊は廣き處三哩、狹き處も尙二哩半に及ぶ。五百噸の汽船あり。一日五回、汽車の發着毎に往復す。さて、汽船は徐々に進行を始むるに、乗客は甲板の上に於て晚

餐を喫しつゝ、河上の風景を貪り看る。晚暉已に收り盡して、星光水に落ち、樹木なく、岩石なく、たゞ灰の如き微塵砂より成れる兩岸は、模糊として一線を描く。をりから、生暖き風は水面を拂うて、遠く又近堪へざらしむ。

居ること三十分、船を捨てゝ、寝臺車に投じ、翌朝七時、シリグリー驛に達す。ここにて再び汽車を乗換ふ。これより以北をダージリンヒ

がほなる土人の蠻歌を送り來り、漫に行客をして悲愴の情懷にく亡國の恨を知らず



マラヤ鐵道と稱す。軌道の幅僅かに二呪、世界無比の小汽車にて、さながら玩具の如し。交通事業の經驗に富める英國政府が、幾多の歲月と莫大の工資とを費して、辛苦經營せる結果の、かくの如くなるを見れば、地の峻険なること、推して知るべし。是よりダーシリンまで僅かに五十一哩、一時間十哩の速力、毎時平均一千尺づつの高度を以て、連山重疊の間を上り行く。忽ち見る、ヒマラヤの支脈、雪を戴いて天空を衝き、蜿蜒として南に走るを。快甚だし。

走ること七哩、スーグナ驛に達す。平原茲に盡き、山勢突兀として、天を支ふる壁のごとく、平原と直角をなして前方を塞ぐ。ベンガル灣頭より此の驛に至るまで三百哩、僅かに

海拔三百呎を上りしに過ぎず。ダージリンまで剩す所は唯三十五哩にして、其の間に七千呎以上の高度を攀ぢざるべからざるなり。汽車は急に速力を緩めて、あくまで臆病に、あくまで謹慎に、平原に直立せる一峯に向つて、蛇の如く徐々として這上る。こゝより以後は、或は峯腰を縫ひ、或は巒巔を匍ひ、忽ちにして千古の森林、忽ちにして萬丈の絶壁、右に曲り、左に折れ、前に在るべき機關車、常にこれを側面に見る。此の間の線路、時にはZをなし、時にはOを形づくり、或はUとなり、或はSとなり、又、或はWとなる。此處に至りては、如何なる旅客も心臓の見えず鼓動し、雙脚の自ら戰慄するを禁ずる能はざるべし。

九時十五分、ナンダリヤ停車場に着き、止ること二十二分茶菓を喫す。煩蒸の空氣は頓に一變して清涼となり、外套を被りてなほ寒を訴ふ。植物も、熱帶のもの漸く盡きて、温帶のものとなる。十一時、カーセオンに着す。此の驛、海面より五千呎、ヒマラヤ鐵道の中に眺望の絶佳なる地なり。仰げば、白嶺々たる高峰、群島の如く前面の雲海に列なり浮び、顧れば、ベンガルの大平原浩々として際涯なく、恒河の流脈日光に映じて、さながら細き銀線を敷きたらんが如く、遠く眼界の外に向つて去る。身は恰も輕氣球に乗りて、亞細亞大陸の中央に高翔せる想あり。午後三時、遂にダージリンに着す。

ダーリジリンはヒマラヤ山脈中第二の高峯キンナンジヤン
ガより直徑四十五哩の距離にある一山脈の半腹に位す。
その地、西藏・ブータン・英領印度・ネパール等に接し、實に西藏
といふ世界の祕密藏を開くべき南方の門戸たり。人口一
萬餘、今英國の保護に歸す。この地、印度總督を始め、印度に
ある歐洲人の唯一の避暑地なるを以て、人口年々に増加し
行くといふ。

二十六日午前二時半、馬の用意既に成れりと聞き、倉皇食を
終へて庭前に出づ。ダーリジリンより東南六哩にタイガーヒルと稱する地あり。最高峯エベレストは、此の地に至り
て始めてその壯容を見るを得べし。旭日遙かに印度洋上

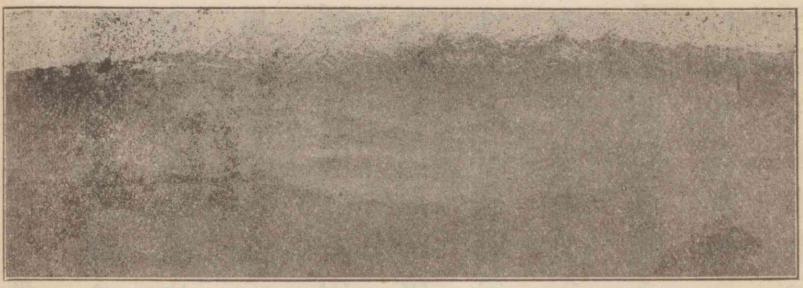
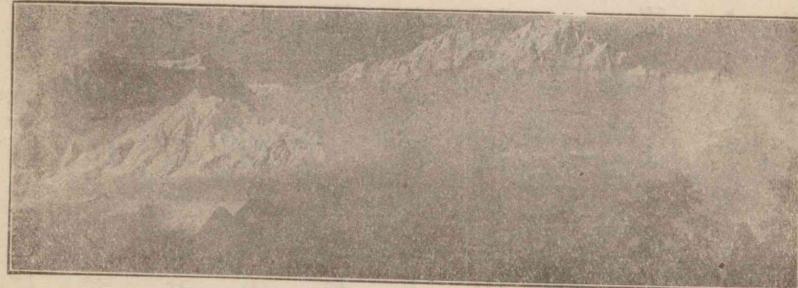
に出でて、此の世界至高の大山脈を照すは、實に天下無比の大觀なり。今や數時の後此の景に接せんとす。恰も絶世の大偉人に謁せんとするが如き感あり。

馬は徐々として、其の深さ、其の廣さ、共に測るべからざる大
渓谷に向へる山腹の石逕を辿る。下弦の月密雲に隠れて、
天地靜寂、只蹄聲の憂々として太古の森林に反響するを聞
くのみ。我等の騎れる馬は西藏駒と稱するもの、體の小な
るに似ず、至つて強健にして、崎嶇たる山道に馴れ、よく一萬
九千呎の高處まで雪を踏みて登りゆくといふ。平生騎行
に馴れざる我は、馬の岩石に蹶く毎に、馬背より投出されん
として、屢々心膽を寒うせり。五時、タイガーヒルに達す。憾

むべし、陰雲四合して、微雪霏々たり。眼前に横たはれるキンナンジヤンガの大連峰すら、雲の紗を隔てゝ僅かに其の彷彿を認め得るのみ。一行馬を下り、樹枝を焚いて暖を取り、待つこと一時。天已に明けて、雪愈甚だし。望を失うて歸途につき、更に明朝再訪せんことを期す。

二十七日午前二時、徒步雪を踏んで發す。昨日の騎行の危きに懲りしなり。四時半、タイガーヒルに達す。此の地、近きは二三十哩、遠きは百哩、四方唯大山脈の限なく連なれるを見るのみ。東南の一角のみやゝ低くして、うちひらけたり。此の一大パノラマの中に收めらるゝ連峰、その高さ一萬呎以上のもの二十五、二萬呎以上のもの十にして、エベレストは西南方にあり、キンナンジヤンガは北方にあり。千山萬岳此の兩大峯の中間及び前後を點綴す。

天將に曙ならんとす。白雲徐々に山脚に收り、連山悉く天を摩する一大黒塊たり。忽ち見る、當面のキンナンジヤンガ、



其の絶巔紫色に變じ、一道の紫光吾人の眼を眩せんとする
を。これ、ベンガル大平原の地平線上に出でたる旭光の、ま
づ其の頂を照せるなり。

此の時、山は、其の上部は紫色に、中間は黒塊、下部は白雲の大
海なり。暫くにして、上部の紫は淡紅に、腰部の黒塊は紫に
なり、又、暫くにして淡紅は琥珀、又黃金色になり、紫色は淡紅
に變じ、遂に全山紅色を帶びたる銀世界となれり。一秒又
一秒、一分又一分、日愈出でて、變化愈甚だしく、距離の遠近に
従ひ、峯より峯に、山脈より山脈に、其の變化傳はり行きて、赤
きもの、紫なるもの、金の如きもの、銀の如きもの、一時に眼界
に映じ來れり。連峰悉く旭光に浴せる時、なほ背後に一大
リエベレスト峰のみ紫なり。

あゝ莊嚴、あゝ雄麗。此の時、此の際、人はたゞ恍然として一
種異様の感に打たれ、其の景、其の情、共に言慮の外にあり、到
底筆舌の形容を許さざるなり。恐らくは、千古の大詩人が
畢生の心血を注ぐとも、此の宇宙無比の大觀に對しては、其
の萬分の一をも描き出すこと難からん。(世界探檢に據る)

小名^{*}は春樹。
詩人

一五 椰子の實

島崎藤村

○名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ。

故郷の岸を離れて、

汝はそも波に幾月。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ陰をやなせる。

われもまた渚を枕、

孤身の浮寝の旅ぞ。

實をとりて胸にあつれば、
新なり、流離の憂。

海の日の沈むを見れば、
たぎり落つ、異郷の涙、

思ひやる八重の汐路を

いづれの日にか國に歸らん。 (藤村詩集)

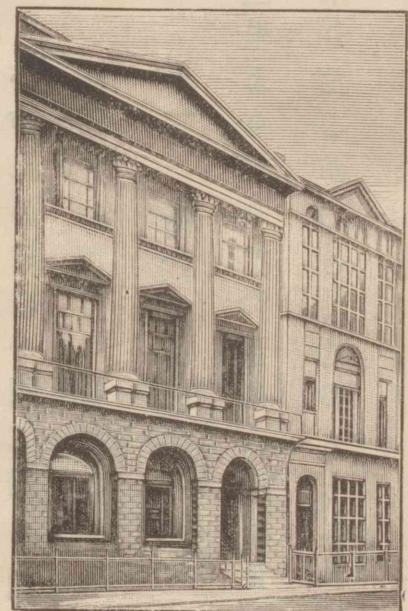
歌帝國文
學者。所
寄人官。臨
御時

一六 倫敦人の生活

池邊義象

巴里より來りて倫敦に入れば、月明き處より小暗き木蔭に
來りたるがごとく、花のもとより竹の林に入りたるやうな
り。

この地の家屋は、大方は名物の黒霧に汚されて、セントポー
ルの大伽藍も國會議事堂も殆ど墨にて塗りたるがごとし。



宅住の豪富の一第ンドンロ
館書圖ンドンロ

さて、全體を見渡すに、この地には煉瓦造多く、佛・獨・塊等の如き石造は少し。又その高さも、大陸の國々にては十階に達するもあれども、こなるは大抵三階若しくは四階なり。また彼等の國々にては、一軒の家屋に數家族同居するが多けれども、こゝには一家族にて一軒を專有しをるもの少なからず。而して、その門内には中庭を設け、屋後には運動場を作り、いはゆるホームの樂みを取るに適せしめたり。

これこの國の特色なり。

彫刻のごときは、特別なる建物にあらざれば、施せることなし。又、室内裝飾等も、巴里に比すべからず。これ、この地の人の何事も實用を主とするが故なるべし。

食物は、鳥獸魚肉を主とし、野菜を從とすること、別に他とかはる事なし。只當地の人は、好んでジャガタラ芋を用ひ、また果物を菓子に製して食ふこと、他國よりも多し。穀物を用ふることも、佛國などよりは頗る多し。料理



宅住の人流中の外郊シンドンロ

は佛國のを第一とすれども、こゝのも、また特有の味ありてよし。酒はウイスキーを一般に用ひ、ビール之に次ぐ。衣服は一口にいへば、最も丈夫なる實用向のものを好み、表面のみの美を喜ばざるが如し。男子の服は、例の、さまであれども、紳士と呼ばるゝ際のものは平生フロツクユート・高帽ならでは外出せず。

道を歩くに、小走りして息もつきあへぬさまなるは佛・獨にもまさり、世の營の程もこれによりて推しはからる。婦人の服も、亦丈夫なるを主とし、強ひて美なるを願はざるが如し。是、秋冬に於ては、例の黒霧をわけゆくことなれば、色合の如何などは問ふ詮もなきによるか。

當地の者の一體に質素なることは、佛・獨等に劣るべくもあらねど、さりとて徒らに勤儉にして貯蓄を事とすといはんは當らず、寧ろ種々の事業に投資して聊かにても利益の多からん事を望むといふ方勝れるが如し。かゝれば各人に就いて調査せんには、現金を所有することは、或は、佛・獨等の人劣ることあらんが、有益なる事業を起して、之に投資し居ることは、到底彼等の及ぶ所にあらじ。これ當國に國家的社會的事業の益、發達する所以にして、國民の進取的氣風の年を経て毫も衰へざる所以なるべし。

英國人が口癖に云ふホームの和樂は、實に他國人には解し難きほどなり。余は一ヶ月足らず某氏の家に客たりしが、

その家族の團欒は眞に羨ましきほどなりき。彼等は常に家を思ひ、家の樂みを思ふ。神の守る處にして、家族の快樂を取るに障りなくば、虎臥す山、蛟棲む河邊も厭はざらん。彼等の植民地にゆくや、必ず夫妻相携へ行きて、愉快なるホームの樂みを樂しみつゝ、各、その業に従ふ。こゝを以て、事業年を逐ひて進み、蠻地も久しからずして文明に化す。他國人の植民地に行くは多くは出稼にして、目的は猶本土にあり。英人は乃ち然らず。英人の遠征に堪ふるは根柢のある事なり。(歐羅巴)

年文名^{*}
歿學者
金之助
大正五

一七 霧の倫敦

夏 目 漱 石

昨夜は夜一夜、枕もとで、ぱちく云ふ響を聞いた。これは近處にある大停車場のためである。この停車場には、一日のうちに、汽車が千幾つか集つて来る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ來ると、何かの仕掛けで、爆竹の様な音を立てゝ相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて、そとを見下すと、そとは一面にぼうとしてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の堀に圍はれて、一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれ

がしんとして凍つてゐる。隣の庭も其の通である。此の庭には綺麗な廣場があつて、春光の暖い時分になると、白い鬚をはやしたお爺さんが、日向ぼっこをしに出て來る。このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡をとまらせてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれさうな位に近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、斷間なく、芝刈器械を廣場の上に轉がしてゐる。この庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿の庭と何の境もなくのべつに續いてゐる。

裏通を隔てゝ向側に高いゴシック式の教會の塔がある。

其の塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃に疊み上げた胴中さへ、ありかゞまるで分らない。それかと思ふ處が、心持黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。

表へ出ると二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと、また二間ばかり先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程、新らしい二間四方が現れる。その代り今通つて來た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切抜かれて、

急に眼の前へ馬の首が出た。それだのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにある。此方から、霧を冒して飛乗つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行違つた時だけ、綺麗だなと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裡に包まれて行く。ウェーベトミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の方を視詰めてゐると、封じ込められた大氣の裏に鷗が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと空の中でたゞ音だけがする。

用事をすまして河沿の道を歩いて來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然、四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身のまはりに流した様に、黒い色に染まつた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇んだ。自分の傍を人が大勢通る様な心持がするけれども、肩が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのかどうだか疑はしい。其の時、この濁々たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黃色に見えた。自分はそれを目標に、四歩ばかり歩いた。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の

中では、瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如くにして居る。自分はやつと安心した。

こゝを通り過ぎて、手探りをしないばかりに向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には同じ様な横町が幾筋も並行してゐて、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な氣がした。それから二町程、真直に歩いた様な心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾げた。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。夫から段々遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。後はしんとしてゐる。自分は又、暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(漱石全集)

一八 蓮月尼

鹽 井 雨 江

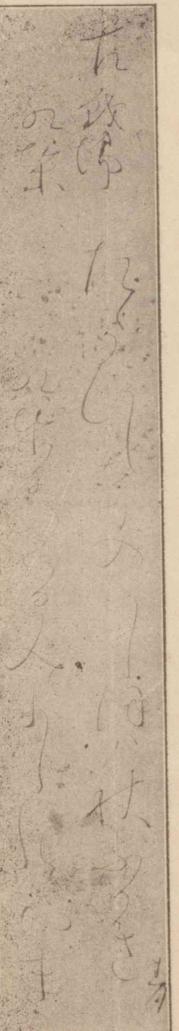
名を聞きてだに、ゆかしく清げなるを、まのあたり見し人に尋ね、或はものゝ本に記せるを見るに、其の人、容色の美しきは、蓮の花の露に濡れたるがあしたの風に匂ひこぼるゝ如く、徳操のめでたくすぐれたるは、望月のくまなき光のすみわたりたるがごとくなりけり。蓮月、名を誠子といひ、父を太田垣光古といひけり。家は代々因幡の鳥取といふ處にありけるが、父の代になりて京に出でて、東山あたりに住みけり。京の東山、名にしるき櫻の土地、花はづかしき誠子は、

文子國學年校良正大師範奈良正男者學高授*

此の名山の花の間に生れたり。

思へば、名山、何のえにしありけん、名花いかなるゆかりありけん。誠子の美しさは容色のみにあらず、心もまたあはれに美しかりけり。文もめだたく、歌にも堪能なりき。才藻のみにあらず、徳行も亦世の常の女子に勝りて、父を敬ひ、母にやさしうかしづきつゝ、親の訓の庭にたちならはしけり。母亡くなりてより、父も秋風に孤雁の聲かなしく、唯誠子を朝夕の力草としたりき。誠子も亦父のみの一柱をわが家

古戰場の紅葉
刀のちかひし本
月たまふ
みよ紅葉ほは秋
やましにほの秋
蓮



尼月蓮

わが身の頼み所としけるが、媒する人ありて、彦根の近藤某といふを夫に迎へけり。妻の道子の道にそむかじと思ふが朝夕の願にして、神に祈り佛に願ふも、書に問ひ歌にいふも、唯、これのみなりけり。誠子四人まで子を儲けゝるが、この世の幸や薄かりけん、園の撫子秋を待たずみな枯盡しては、何處何時までも離れじと思ふ軒のつまさへ、無常の風に誘はれて影をとゞめず、あさぢふが宿、また父とわれと唯二人とはなりにけり。かくて誠子が縁の髪と共に浮世の交を断ちて尼となり、蓮月と呼びけるは三十あまり三つばかりの時なりけり。

誠子が四十歳ばかりなりける頃、父も亦歸らぬ旅路に出で

立ちぬ。

常ならぬ世はうきものとみつぐりの

一人のこりてものをこそおもへ。

たらちねの親のこひしきあまりには、

墓にねをのみなきくらしつゝ。

いかに嘆けどもさらぬ別のせん方なくて、岡崎といふ里に
うつりて、風月を友として、世になき父母、わが夫、わが子をし
のびて暮したりけり。

岡崎の里のねざめに聞ゆなり、

北白川のやまほとゝぎす。

冬畠の大根のくきに霜きえて、

あさとで寒し、岡崎のさと。

父のありけるころより、家には貯とては無く、心は世外にあ
れど、さすがに此の世に在れば、たづきなくては叶はねば、自
ら植もてつくねておのが詠める歌を彫りたる茶瓶など造
り出でて朝夕の料としたりけるに、世にいたく珍重せられ
たりき。

蓮月の名は、歌に、陶にかくれなくなりければ、世を捨果てん
と思ふ身の、なかくに世に交しげくなるをいたく思ひわ
びて、彼處に移り、此處に住み、果ては北山の奥ふかき西賀茂
のなにがし寺の茶室に引籠り居てまた出でざりき。この
頃の閑居の作ならん。

露の身をたゞかりそめにおかんとて、

草ひきむすぶ山のしたかけ。

北まどの風にやれたるふるすだれ、

めもあはぬまで寒きよは哉。

うなる子が垣根に近くつめばこそ、

草のめでたき春も知らるれ。

いたく行ひすまして、明治八年十二月三日、八十ちあまり五
つにて、

願はくは後の蓮の花のうへに

くもらぬ月を見るよしもがな。

と遺して空しうなりにき。

。

誠の心一つに孝悌の道をふみて、遂に誠子の名に恥ぢず、德
も才も姿も清くうるはしくて蓮月の名にそむかぬ世を通
しけることあはれなりしか。(雨江全集)

一九 吾妻路

阿 佛 尼

〔一〕 藤原爲家の室、
〔二〕 鎌倉時代の人、
〔三〕 後宇多天皇建治元年十月。

廿七日。明けはなれて後、富士川をわたる。朝川いと寒し。
數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

さえわびぬ、雪よりおろす富士川の

かは風こほるふゆのころもで。

今日は日いとうらゝかにて、田子の浦に打出づる海士ども
の漁するを見ても、

〔一〕 河國庵原郡蒲原

心からおりたつ田子のあまごろも、
とぞ言はまほしき。伊豆の國府といふ處にとゞまる。

伊豆國三島町。

廿八日。伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、

たまくしげ箱根の山をいそげども、

なほ明けがたき横雲のそら。

足柄山は道遠しとて、箱根路にかかるなりけり。

いとさかしき山をくだる。人の足もとゞまりがたし。湯

坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、又、麓に早川といふ川あり。まことにはやし。木の多く流るゝを、いかに

と問へば、海士の藻鹽木を浦へ出さんとて流すなりといふ。

あづまちの湯坂を越えて、見渡せば、

しほ木ながるゝ早川のみづ。
湯坂より浦に出でて、日暮れかかるに、とまるべきところとほし。伊豆の大島まで見わたさるゝ海面を、いづことがいふと問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。あまの住む、その里の名もしらなみの

よするなぎさに宿やからまし。

*丸子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匁といふ處にとゞまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

(十六夜日記)

今*の酒匁川。

二〇 浮島原

義 經 記

^(一)_左兵衛權佐源頼朝。^(二)_左義經。

佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つくぐとこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。

^(三)_左馬頭源義朝。

互に心のゆくほど泣きて、後、佐殿涙をおさへて、^(一)さても頭の殿におくれ奉りて、その後、御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。賴朝、^(四)池の尼の宥められ

^(一)_{伊豆}蛭が島。
^(二)_{伊藤}祐親。
^(三)_{北條}時政。

しによりて、伊豆の配所にて伊東・北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由は幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企て候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり。賴朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人をのぼせんとすれば、平家と一つになりて、却て東國をや攻めんと存する間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待

(二)八幡太郎源義家
(三)新羅三郎源義光

ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戦に、舍弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にいかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの御返事もなくして、袂をぞしばられける。これを見て、大名・小名・互の御心おしはかりて、皆袖をぞぬらしける。

(三)京都の東南に在
(四)京の北にあり

しばらくありて、御曹司申されけるは、仰のことく、幼少の時、御目にかかりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六までかたつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳参る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候こゝちしてこそ候へ。身をば、君に進らする上は、いかゞ仰に従ひ參らせでは候べき。と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。

(二)藤原秀衡

(二)文禄五年死す。
(三)徳川氏の世臣。
(四)徳川家康。

二 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出來て、既に危く見えさせ給ひしかば内外の醫療、術を盡しけれども、その驗

なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せ置かる。人の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく申しけるは、「殿も定めて覚えさせ給ひなん。重次が昔此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上、醫療其の詮なし。且は命を惜しむに似たり」とて、用ひ給はず。重次大に怒つて、「斯程大事の腫物輕々しく思召し悔つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに、又良醫して治し参らせんと

するをも用ひ給はず、失せ給はん事、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、彼等争てか治し参らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば、御先へ参らん」とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大に驚かせ給ひ、「あれ止めよ」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で、引留め、仰せらるべき旨あらせられ候」といふ。重次大いに聲を怒らかして、最期の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿はらの止めやうや」と罵つて、出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿」といはれて、「げにさも候」とて、

御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縱ひ家康が命を終るとも、汝が世に在らんを賴にこそ死すべけれ。又、汝等も如何にもして一日も世に残りて、若き者ども撻して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある」と仰せければ、「いや／＼、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、大死せん人の御供、其の詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと

家康の女督子北條氏直に嫁す。

叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れも敬はれもつかまつれ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御聟の北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れしはかぐしき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されん事、亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、「あの年よつたるかたはものは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世に恥をさらすらん。」と後指さゝれん事老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも、武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈め

もを、世にもあはれに思ひしが、今は、此の老人めが身の上になつて候と存すれば、殿におくれ参らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候。」と申す。

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば、醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべしとも一日も生残つて、後の事よきに計らふべしと存するや否や。」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰をや背くべき。」と申す。「さらば、醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて参つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次艾取

つてすう。御灸の痛覺えさせたまはねば、艾を増加ふること多くして、後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水・血・夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉し泣に聲を限に泣く。御前伺候の人も感涙を共に流しけり。(藩翰譜)

三 稅所敦子君を誅す

高 崎 正 風

嗚呼、稅所刀自逝きぬ。わが無二の友たりし掌侍正五位稅所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は鹿兒島士民の普く知る所、その後半生の名譽は輦轂の下に隠

(一) 明治三十三年二月十四日殺す
 (二) 七十四年
 (三) 宮内省税所長
 五年歿
 男爵
 明治四年七十

れなし。然れども、前後に通じてよく之を知悉せるは蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歳十九の頃なりき。相見しは歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。君は正風と藩を同じくして京都に勤務せる稅所篤之氏の繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも、夫に訣れたり。嗚呼、君は京都に生れ、京都に成長し、京都に結婚せる優美艶麗なる婦人なりき。當時、鹿兒島の風習たるや、同郷人の外は他所者としてこれを賤しみ、その姑の如きも京女の新に來りて同居することを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて、遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸り



千 稅 所 敦

て、その姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとしても猶難色あらん否、離婚をも乞ふなるべし。君が己れに克つ勇氣に富み、志操の秀抜なりしことは、之を以ても知らる。况や、京都より齎し衣服調度の美なるものは、擧げてこれを前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敵を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、かつて君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月をかさねずして、たちまち君を杖柱ともたのむに

島津齊彬。

至れり。

國君順聖院公之を聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して、大いに喜びて曰く、「吾人を得たり。」と。世子天す。君悲歎に堪へず、自刃して殉せんとす。姑取縋りて、泣きて曰く、「われ今御身を失はゞ、何を樂しみてかこの世に生残るべき」と。君これが爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて君が傍を離れず。又、正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母もしくは姉にあてゝ送らる。當時、正風迂疎にしてその何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞、誰かこれに

加へん。後久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して、老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

明治八年に至りて、坤宮女流の人材を徵し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫を始め、同僚宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに違あらず。君もと蒲柳の質しかも、公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年、大いに病む所ありき。天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕

せしめんとしたまひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひ
しが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して氣
力を養ひき。癒ゆるに及びて、宮中に入り、鞅掌すること故
の如し。

鳴呼、君が八百年以來、唯一人の女文豪たりしことは、世人皆
これを知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食より
も甚だしく、わが彰善會の起るや、尤も熱心なる贊成者とし
て金員を寄附せらるゝこと數々なりき。君、去んぬる一月五
日、正風が病床を問ひて、告げて曰く、「明年七十七、謂はゆる喜
字の齡たらんとす。いさゝか自ら壽すべし。」と。正風大い
に之を贊し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せん

と期したりしを、今はつひに全く畫餅となりぬ。

正風、今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥
に横たはりて葬場に會するをだに得ざるは、何らの慘ぞ、何
らの痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病をつとめて此の誄
を草し、兒元彦をして代讀せしむ。鳴呼、哀しいかな。

二三 綾のみけし

税所敦子

ちくらねの母のまくばりまもと
あやのみけしもとまもと

正風の長男、海
軍少佐、明治三十一年死す。
旅順に戰死す。

佛法僧。

善行を表彰する
會。男爵その會
長たりき。

明治三十三年。

京都の醫高島清
四年歿す。明治十

高畠式郎

おとと朝立ちゆけを 疾篤の
ふ下がくわまぐすなくあり

大納言柳原均光
の室。慶應二年歿す。

柳原あ子

ゆふ風みちくらよ鳥の教おもて

鶴村碧東

福岡藩士野村貞

貫の後妻す。慶應三年歿す。

かほの激にあくよ毒の流れ糞を
追ひあくよじてゆく蟲鷹かふ

吉田垣蓬月

やくうねいのつうをなまけふそ
鶴月夜ればすり

兼好法師

鼎かづき

本眞園山三人。
山城國葛天皇の頃の醜。
御室御室在郡の花。
御室御室派のり花。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入る餘り、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻おし平めて、舞出でたるに、満座興に入ること限なし。
暫し奏でて後、拔かんとするに、大方拔かれず。酒宴事さめ



て、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へがたかりければ、叶はずべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら、人の怪しみ見る事限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さ

こそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて、聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者・老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引きたまへ。」とて、藁のしぶをまはりにきし入れて、かねを隔てゝ首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら、抜けにけり。辛き命もうけて、久しくやみ居たりけり。(徒然草)

去ぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出來て乾に至る。はてには、朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に、塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや。病人を宿せる屋より出で來りけりとなん。吹迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら烟を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて、あまねく紅なるなかに、風に堪へず吹切られたる烟飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人の現心あらんや。或は煙にむせびて倒れ伏し、或は烟にまくれて忽ちに

死しぬ。或はまた纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費幾そばくぞ。このたび、公卿の家十六焼けたり。まして、その外は、數を知らず。すべて、都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人。馬牛の類邊際を知らず。人の營皆愚なる中に、さしも危き京中の家を造るとして、寶を費し心を惱することは、勝れてあぢきなくぞあるべき。(方丈記)

二六 日蓮上人

高山林次郎

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歷史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理

*
す明家號は櫻牛。
○治三十
五年
博士批評

なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて満天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、砂に黃金を換へ、糞に米を代ふるなり。」

と喝破し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまで及びしことは、後世の人をして感涙に咽ばしむるものあり。今左に一二の例を舉ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。こ

の人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋



に等だかに時相^{*}
西一模
流をめ、斬一里餘。
す減ら子ら蓮。
じれ時人蓮。
宗と佐死に龍口北條
渡なし口の

尊及び十方の諸佛、手を引き袂を執へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墮すべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喻ふべきものなし。天下の威武を敵として、一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。」上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年日本六十六箇國、島二つの内に五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日もかゝらず一日に一度は必ず攀登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩

を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中にこれと比較し得べき美談あるか。

武藏國荏原郡東京の南三里余
上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乗馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろいろいたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附けて候うては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、

恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ
偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。こ
の情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの
情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人
格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花
と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る
絲、即ち刺を織る絲なるにあらずや。（樗牛全集）

大博心理學者
東京帝國學
教授

二七 蘭人の趣味 松本亦太郎
天然に對して趣味・同情を有し、人世の流轉に對して愛惜の
念厚く、過ぎ行く刹那々々の現在を楽しむは、蓋し和蘭人一

般の特質である。和蘭の地たる、元來、一面の低地で、河流は
停滞し、海水は浸潤し、濕氣深く、天與の美は無いのであるが、
國民は勤勉にして、且趣味に富み、海を堰きとめて港を築き、
河水を疏通して船舶の來往に便にし、風車によりて、水を汲
干して牧場を設け、泥澤を乾かして森林を作つた。それが
ため、國中到る處に、大樹鬱葱として生ひ茂り、牧草芊々とし
て地を被ひ、禽鳥蕃殖して牧牛と群を共にし、田野の風光生
生の氣に充ちて、恰も樂園の如くである。而して、又、蘭人は
河畔に林間に頗る雅致ある別墅を設け、極めて閑靜なる住
居を爲し、歐大陸の競争を外にして、天然の平和を樂しんで
居る氣味がある。

和蘭を旅行して見ると、本來無味の天地が、如何にして、彼の様に愉快なる風光に變じたかと驚くばかりである。山水の景色を畫がき、且、天然と人間とが調和して居る田園の風光を畫がくに於て、和蘭の畫家は、歐洲の畫界に先鞭を着けた。此洋畫に於ては、山水畫・田園畫・風俗畫は、和蘭を以て源泉とするといつてもいゝからである。北歐に於て、最も天與の好風景に缺乏せる和蘭から、許多の卓絶せる山水畫家を輩出せしめたのは、如何にも不思議の様であるが、この國に入つてみると、その譯がわかる。蘭人は、自然に對して、深い趣味を有して居るのである。英國の隆盛なるに先だちて、和蘭が、政治・宗教・學術・商業・航海等に於て活動し、聲名を世

界に揚げたのは、一は、英國人と等しく、自然に對し人間に對し、深い趣味・同情を有して居つたからで、これが國民の大いなる奮發心を喚起したのであらう。(渡り鳥日記)

大文
學者。
正四年
發す。

二八 蛙の聲 長塚 節

春は空からも、土からも、微かに動く。毎日のやうに、西から埃を卷いて来る風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふはくした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かすに居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ存分に吸つて、其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感じ

大治四年
文書

させると、田圃の榛の木のちみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の情態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くゝゝゝと鳴き出すことがある。空から射す日の光は、そろくと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸つて止まない。土はすべてを段々と刺戟して、堀のほとりには蘆や芝や其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟さに満たされた空氣を更に鈍くするやうに榛の木の花はひらくと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の情態から離れて軟な草の土に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。

さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。彼等は更に、春を一切の生物に向つて促す。草や木が心づいて、其の活力を存分に發揮するのを見ない間は、鳴くことを止めまいと力める、田圃の榛の木はとうに花を捨てゝ、自分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらつて居る周圍の林を見る。岬のやうな形に偃つて居る水田を抱へて、周圍の林は漸く其の本性のままに、勝手に白っぽいのや、赤っぽいのや、黃色っぽいのや種

種に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雜木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞かしさうに葉の間から、こつそり四方を覗く。雜木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、「春がふけた」と呼びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越えく。鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰けばまばゆき

に堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉のちぎれる迄は、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈々、鳴き誇つて、櫻の木の様な大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に附いて居たすべての雜草が爪立して、只空へへと暖な光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行する事を好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、めい／＼に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲し

いと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら殊更に鳴きたてる。白い絹絲の様な雨は、水が田に満つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し／＼働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ／＼と促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中の暖さに人もぐつたりと成つて、田圃の短い草にごろりと横に成る。

静かな夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を揺らして、百姓

のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴く其の聲にゆられつゝ、夜の間に生長する。櫟や樺や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが、鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと／＼と屢々梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふ様に、力強い綠

が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。（主）

名は夏子。女流文學者。明治二十九年歿す。

二九 都に着きて 檻口一葉

今四日午後三時、この地に事なく着き申候。御申含めこの通り停車場より車をやとひ、此處の伯母様が御許まで時の間に飛ばせ参り、いさゝかもまごつくやうの事はなく候ひしまゝ、御安心下されたく候。

土産の品々、伯母様大喜び遊ばされ、何々は何と申しても國許のこそよけれ、この地にも面影うつしたるがなきにはあらねど、味格別におどりて、かくはあらじ。と一人引寄せて大事がられ候。

「この地着の御知らせとくく參らせよ。」と促し立てたまひ、「一人娘の一人旅をはじめてさせたる親心、そなたが思ふやうなるものにはあらで、此方の空のみ打ちながめ物案じに日を送るべきなれば、一時の延びは一時の不孝ぞ」と仰せられ候。この巻紙も封筒も伯母様より賜はりたるにて御座候。私はまだ行李も解きあへず、それが麻繩緩めんとて立ちあがり候處、文書く紙は此處にもあるものを。他人行儀うちすてよ。」とて、御机の引出よりこれをば取出させ給ひ、御みづから墨おしそりたまひて、「こゝにある間は我が家の子ぞ。隔て心もつな。」とて、さも懐かしげにおほせられ候。御寫眞に

て御目にかかりしとは異なり、御ものごしはさながらの母様に御座候。

始めて御逢致したる從兄弟たちが物語聞き候に、何れもおびたゞしきさかしさにて、何事も能く御承知に候。私よりはるか年下のものにても學問はよほど上かと思はれ候。この地の人はすべてこのやうにさかしきにや。但しは伯母様御子たちばかりとりわきての發明かは存じ候はねど、とにかく今までとは心得改め候うて、十分勉強致候上、わざく此の地に出し下されし御恩報じも致すべく、落ちつき候上にてゆるく文差上候はんなど、無事着の御知らせかたぐこれのみ

申上候。

近邊の御友だちにもやがて文出すべく候へど、若し尋ねに来る人候はゞ、事なく着きし由御話下されたく候。はなむけ賜ひし方々へも宜しう願ひ上候。かしこ。

(一葉全集)

三〇 道 大 西 祝

*哲學者。東京専門學校講師。京都帝國大學文科大學教授。明治三十三年歿す。

月ならば指して云はんを、
花ならばとりても見んを、
月ならぬ月の光と
花ならぬ花のにほひは、

さしていひ取りて見るべき
ものにはあらじ。

波やめば、音と消ゆれど、
風ふけば、木の葉と散れど、
散りゆかぬものこそ見ゆれ、
きえゆかぬ音ぞ聞ゆる、

波に木の葉に。

路の邊の草葉のつゆに
まどかにも宿れるものを

尋ねつゝ、きはめも行かば、
飛ぶ鳥の翼なくとも、
空かくる雲にのらても、
天地のひろき心の

知れざらめやも。(大西博士全集)

訂五女子國語讀本卷六 終



終

女子國語讀本卷六

終

著作者 吉田彌平
小島政吉
岡田利美
篠田正郎
原亮一
金港堂書籍株式會社
東洋印刷株式會社

定價
卷一、二、三、四
各金參拾參錢
卷五、六、七、八、九、十
各金參拾壹錢

複製



不許

印 刷 兼
發 行 者

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社

代 表 者

東京市芝蘭町三丁目二番地

東洋印刷株式會社

明明明明明大大大大
治治治治治治治治
三三三三四正正正正正
十五十六十七十八十九
年年年年年年年年年年
三十一年二十一年二十
月月月月月月月月月月
二二二二三三三二二二二
三十六七十八十九十九
六七九七二二十九十九
日日日日日日日日日日
初打打打打打打打打打
版版版版版版版版版版
刷印版六十正訂日行發
版六十正訂日行發版

年正正正正正正正正正

年正正正正正正正正正

年

年

年

年

年

年

年

年

年

年

訂五女子國語讀本全十冊

發賣所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社
各府縣特約販賣所

